

(要約版)

ルーマニアにおける水たばこ普及の現状と歴史的背景 —オスマン帝国の支配との関連で—

助成研究者 黛秋津 ((東京大学大学院総合文化研究科) バルカン史)

1. 研究目的

本研究は、人々の生活に密接にかかわる食や嗜好品などの分野に注目した研究がまだわずかしか行われていないオスマン帝国史研究において、中東を中心に広く見られる喫煙具の一つである水たばこに注目し、旧東欧のルーマニアにおけるその使用の現状と歴史的経緯を明らかにすることを通じて、複雑な民族・宗教・文化が共存するバルカンという「地域」を新たな視点から考察することを目的とする。

本研究課題着想の出発点は、一つの素朴な疑問であった。それは、今日、水たばこというものは一般には「イスラーム」や「中東」などと結びつけられてイメージされているが、歴史的にイスラーム帝国の支配下に置かれていた非ムスリム臣民もこれと深く接していたのか、ということである。バルカン地域での水たばこ喫煙者は果たしてイスラーム教徒だけだったのか、あるいはキリスト教徒もそれを共有したのか。もしキリスト教徒もそれを用いてたばこを喫煙していたのだとすれば、その慣習はいつ頃消えたのか。あるいは現在でもその痕跡は社会に残っているのか。これらのいくつかの疑問点を、明らかにすることが本研究の目的であった。

2. 研究方法

本研究の方法は、ルーマニアにおける水たばこについて、フィールドワークによる現地調査と、歴史的経緯を探るための史料の分析、の二つの柱からなる。

前者については、ルーマニア国内のいくつかの都市を調査対象とし、繁華街や旧市街にある店舗等で、水たばこ使用の有無を確認と関係者から聞き取りを行うことによって、水たばこ使用の現状を把握し、また歴史・民俗博物館を訪問して、当該地方の伝統的な生活の中に水たばこが存在していたか否かを調査する。調査地は首都ブカレストの他、ルーマニア国内の各地方において2カ所前後の都市を選んだ。

一方後者については、先行研究文献を日本および現地で収集してこれまでの研究状況を押さえた後、一次史料の中に、たばこその喫煙具としての水たばこに関する記述を調べ、現在のルーマニアの領域における水たばこの普及、定着、あるいは衰退などの歴史的経緯を明らかにする。水たばこのような道具に関しては、公文書にはほとんど登場しないため、ルーマニアで刊行されている外国人旅行者の旅行記を一次史料として用いる。

3. 研究成果

- ・現在のルーマニアにおける水たばこについて

現在主要都市を中心に水たばこを喫煙できるカフェがあり、またレストランなどで水たばこのディスプレイが見られるが、いずれも「オリエンタル」な雰囲気と結びつけられ、現在のルーマニア人の持つ水たばこに対するイメージは、他の欧米諸国の人々のそれと違いはない。そこで、ルーマニアにおいて、過去から今日までずっと水たばこを使用し続けている人々はいないかどうかを調査したところ、ムスリムのトルコ系やタタール系住民は 20 世紀半ば頃まで水たばこを使用していたことが確認されたが、その一方で、ルーマニアの一般民衆の水たばこ使用は、おそらく一般的な習慣ではなかった。

- ・ルーマニアのたばこの歴史に関する先行研究

人文社会系分野に関するたばこの研究はあまり行われておらず、考古学の分野では出土したパイプなどの研究があるが、民俗学や歴史学の領域では、研究が非常に少ない。後者に関しては、史料的な制約があることが原因と考えられる。

- ・ルーマニアにおけるたばこと水たばこの導入

たばこのルーマニアへの導入は 16 世紀末ごろとされ、たばこ喫煙文化は圧倒的にイスタンブールからの影響を受けていた。そして喫煙のために用いられた道具の一つが水たばこであり、地元の公や貴族層は、イスタンブールの習慣にならって水たばこを使用し、喫煙の習慣が定着した。その他、たばこはコーヒーハウスと結びつき、そこを利用する市民層が水たばこを使用する機会を得た。しかし地方農村にはほとんど普及していなかったと考えられる。

- ・近代化の中の水たばこ

19 世紀初頭からバルカンで民族運動が見られるようになると、ワラキアとモルドヴァは 1830 年代頃からフランスをモデルとした近代化を進め、社会の西欧化が進んだ。それに伴い貴族層の風俗習慣も西欧化し、その頃生じたヨーロッパ製の木製パイプと紙巻きたばこの流入の影響もあって、水たばこで喫煙する「トルコ風」の習慣は廃れた。そして独立を果たした近代国家ルーマニアは、水たばこを東洋的な表象とみる西欧の価値観をそのまま受け入れることになった。